

伝文

日本口承文芸学会 会報
第74号 2024年2月 発行

日本口承文芸学会
〒663-8184 兵庫県西宮市鳴尾町1-2-18
武庫川女子大学教育学部 SE-401 (高木史人) 研究室
Tel: 0798-31-0546 (直通)
E-mail: info@ko-sho.org

翻訳の挑戦と文化的洞察：『ジャンガル』英雄叙事詩の探究

藤井真湖

モンゴルの英雄叙事詩の精華の一つに故若松寛先生の邦訳された『ジャンガル』がある。一般に、翻訳という営為には深い原文理解が求められるが、この『ジャンガル』という英雄叙事詩は見かけ以上に難解であるので、邦訳をやり遂げられた若松先生には敬服の念を抱かざるをえない。しかし、先生の翻訳でもよくわからない箇所もところどころある。

翻訳のことを考えると、拙大学の同僚、故坂元多先生（元 NHK 教育番組ディレクター）を思い出す。坂元先生よれば、訳文が不明瞭な場合、原文の理解不足が原因であることが多いと指摘されていた。先生は英文翻訳を念頭において発言されていたのであるが、この教訓は『ジャンガル』に登場する英雄ジャンガルの宮殿に関する昨年度のカルムイクの国際学会発表の際に役立った。

ジャンガルの宮殿は「アルワン (10)・ダウハル (層)・ユスン (9)・ウング (色)・トルログ (固有名詞)・オルド (宮殿)」と表現されるのだが、これを若松訳では「十層九色のトルログ黄金宮殿」となっている。直訳として間違っていないものの、どのような宮殿なのかはよくわからない。モンゴル国立大学に留学中、『ジャンガル』をカルムイク語から現代モンゴル語に「翻訳」した故ドゥゲルスレン先生に尋ねたところ、宮殿は十階建てで、外装が九色に彩られている可能性があるとの解釈であった。ただし、先生も実はこの解釈に自信があったわけではなく、カルムイク語版のファブルスキーの挿絵を指さされた。見ると、そこに描かれた宮殿には仏像のレリーフが刻まれている。それゆえ、その絵は、勇者たちが戦いに出かける前に参拝する仏教寺院であって、ジャンガルの宮殿ではない。

私見では、この表現は、伝統的な天幕を10個重ね合わせた構造で、10層が形成されているため、断熱層が9つあることを意味している。「色」と解釈されてきた「ウング」は「断熱層」と解釈することができ、トルログは、トル（網）から派生した形容詞で、天幕を網のように重ねたことを表したのである。

翻訳は、言葉の置き換え以上のものであり、文化的背景や文脈の深い理解を必要とする。カルムイク語で原文を読める人はその解釈を公開することがないので、現地の人々の解釈は不明であるが、学会では意外にも関心をもってもらえた。この経験をとおして、翻訳研究は外国人にも基礎的研究の余地を提供しているジャンルであることを知り、励まされたしだいである。（愛知県）

中村 とも子(東京都)

今回はパネリストに間中一代氏(栃木語り部の会)と矢部敦子氏(小平民話の会)を迎えてのシンポジウム形式で、2023年10月14日にオンラインで開催された。

初めに、例会委員中村が実施したアンケート結果報告を行った。子育て、孫育て世代はジャンルとしての昔話やその意義をほとんど認識していないし、また、現代の語り手たちも、前近代的な価値観や内容の理解が難しくなったことから、子どもに語るのをためらっている傾向が見えた。このような状況で、子どもに昔話をどのように手渡ししていくのか、二人のパネリストの経験から探った。

間中一代氏は、昔話は読むものになっているが、語って聞かせると、話は子どもたちの耳に確実に届くという。食育教育で、郷土食「しもつかれ」の食材や料理にまつわる話を語った時、ある子は触発されて自由研究をまとめたりした。また、様々な年齢層に向けて昔話に触れる活動をしている。博物館では、古民具や囲炉裏などを配置し、今の生活から消えた物を視覚で補ったり、高齢者対象の温泉でのイベントや、町おこしの場にも出向いて語る。このような働きかけは、高齢者と子どもの中間点、つまり、若者や子育て世代にも話を聞いてもらう機会を増やすためだという。語りの会に人が聞きに来るのを待つだけではなく、様々な機会に昔話とコラボレーションすることが必要だという。ハロウィンのイベントで語ったこともある。若者文化に根付き始めた場で昔話を届けることは、いずれ彼らが子どもに昔話を届けることにつながるかと、間中氏は期待している。

間中氏が広域と多年齢層に働きかける語りの実践者だとすると、矢部敦子氏は、対照的に「半径2メートル以内」にいる相手に届く語りを実践している。学校や図書館ではひとつの話を始めから終わりまで語りきることが当たり前だが、形にとらわれず、遊びながら、対話しながら生まれる語りを家庭の中に取り戻せないだろうかという。矢部氏はいう。対話を重ね、子どもは相手の顔を見ながら、ことばとことばで通じあう力を獲得していく。そこにお話を聞かせる場が自然に生まれる。その信念から、矢部氏は、テキストを丸暗記するのではなく、耳で聞いて覚えて語ることを奨励したり、知人のカフェを利用して、その場に来る人たちに赤ちゃんとの手遊びや語りを教えたりした。コロナ禍や諸事情から中断を余儀なくされたが、再開したい気持ちは薄れていないという。

お二人の発言を踏まえ、コメンテーターの小池ゆみ子氏が、遠野の伝承の語り手、正部家ミヤさんに触れながら、遠野の教育現場での実践を紹介し、また、和久津安史氏が、パネリストの話の的確に要約して、参加者への理解につなげた。

忘れられつつある昔話はもう子どもに伝わって行かないかと危惧したが、人と人、親と子を結び付ける最良のものという信念を持つ方々が力強く活動していることを再認識した機会であった。

特集:各地の語り・語り手・語りの場の紹介

古民家の炉端で聞く昔話 ～野外博物館・日本民家園の期待～

神田 朝美(神奈川県)

川崎市立日本民家園(以下、民家園)は、昭和42年(1967)に開園した約3万㎡の敷地を有する野外博物館である。移築復原した古民家を展示するとともに、日本の伝統的な生活文化に関する資料を収集・保管・展示することを事業とすると定めた条例に則り、東日本の民家を中心に25件の近世の建物を移築し、そこで使用してきた民具などととも展示している。また、本館には建築(常設展)と民俗(企画展)の屋内展示室も設けている。指定管理者制度のもと管理業務は指定管理者が担当し、園内の保全や広報、物販、ワークショップなどを行っている。一方、学芸業務は川崎市教育委員会のもとで市職員が普及啓発事業や文化財関連業務を担っている。

民家園では昔話の公演を定期的に行っている。その位置づけは、古民家の旧所在地における暮らしや伝統を伝えるための普及啓発事業の一環である。そのため、昔話の公演は学芸業務担当者の管轄となっている。各地方の暮らしに根付いた無形民俗文化である昔話の公演を実施することにより、展示古民家への理解を高めてもらうとともに、そこで営まれていた暮らしへの興味関心を喚起することを狙いとしている。ゆえに、

昔話の語り手たちに求められるのは、余興ではなく、展示の一部としての「語り」であり、古民家とそこでの暮らしに関心を持つきっかけとなってもらいたいことだ。このような民家園側の意図と、文化財活用の目的とから、現在、工藤家住宅（国指定重要文化財。岩手県紫波郡から移築された曲り家。）を会場として、次の4組の団体・個人が昔話の公演を行っている。

＊多摩区ストーリーテリングおはなし万華鏡による「万華鏡のむかし話」毎月第1土曜日

＊語り部・大平悦子氏による「遠野の語り」偶数月第2土曜日

＊語り部・荻原淑子氏（みちのく・むかし語り）による「みちのく・むかし話」奇数月第3土曜日

＊日本民話の会による「お国言葉で語りっこ」偶数月第4日曜日

民家園で昔話の公演が始まったのは、平成9年（1997）。当時、来園者が減少し、協力者会議などの提案で行われたのが、地元のストーリーテリングのチームによる古民家を活用した囲炉裏端での昔話の実演（「炉端で語る昔話」）だった。この試みは、当初、民家園まつりの催しなどで不定期に行われ、語り手も川崎市在住の俳優に依頼したり時間もまちまちだったが、平成17年（2005）以降は定期公演になって、徐々に語り手が増え、会場も語り手で決まった古民家に固定された※。

定期公演に最初から関わってきたのが、地元の多摩区ストーリーテリングおはなし万華鏡であり、現在も毎月昔話の公演を行っている。おはなし万華鏡の語り手は、地方に伝わる話を語る他の語り手たちとの違いから、「私たちは語り継いできた昔話ではないんですよ。創作されたお話も多いんです。」と来場者に説明しているが、特に幼い聞き手には伝承の話も作られた話も実際のところ関係がない。語る話は絵本などで馴染みのあるものも多く、来園者だけでなく他のボランティアからも親しまれている。

ストーリーテリングの「万華鏡のむかし話」に対し、「遠野の語り」は、遠野で生まれ育った大平さんが、遠野の言葉で自分が聞いたり調査したりして得た話を語る。また、柳田国男の『遠野物語』から一話選び、遠野方言でアレンジした語りと本文とを両方披露して聞き比べてもらう。時には遠野の生活や文化も、写真や実物を使って紹介する。

「みちのく・むかし話」の語り手・荻原さんは、出身地である花巻の言葉で、岩手の話を語る。子どもがいる場では昔話を中心に、大人の来場者が多い際には、自身の子どもの時の体験や宮沢賢治の思い出などの貴重な話題もあげる。もともとは3名のグループ・みちのくむかし語りとしてスタートし、岩手の他に山形の話も語っていた。他のメンバーが高齢などの理由で公演できなくなる中、荻原さんは今も一月おきに語りに来てくれている。毎回最後に語られる「おしまい話」も人気がある。

この「みちのく・むかし話」に偶然参加して古民家での語りに関心を持ち、昔話公演に加わったのが、日本民話の会による「お国言葉で語りっこ」である。その名称の通り方言によって語り手が実際に身近な人たちから聞いたり調査したりして得た昔話を語って聞かせる。毎回、3種類の地方の言葉でテーマを決めて公演を行う。

昔話の公演の際には、真夏の暑い盛りでない限り、日本民家園炉端ボランティアの会による囲炉裏で火を焚く協力もあるため、「古民家の炉端で聞く昔話」が実現できる。このことも、昔話公演人気につながっている。しかし、聞き手（来園者）に語りを楽しんでもらうだけではなく、この公演が伝統的な日本の家屋や暮らしへの関心につながるからこそ、民家園が期待するところなのだ。

日本民家園や昔話の公演に興味を持った方は、まず、日本民家園のウェブサイト

(<https://www.nihonminkaen.jp/>)を確認してほしい。

※会場が工藤家になったのは、新型コロナウイルス感染症拡大以降である。それ以前はそれぞれ別の民家を会場とし、聞き手は炉端に座って参加できた。現在は感染症対策から、語り手には炉端に座ってもらい、来場者は土間で聞いてもらっている。工藤家は園内で最も大きい民家の一つで、広い土間を有しているため、公演会場に選ばれた。



事務局便り

○令和5・6(2023・2024)年度 新役員(◎は委員長、○印は運営理事)

会 長	○丹菊 逸治(北海道・東北)
事務局	○高木 史人(近畿) ○達 志保(中部) ○藤井 真湖(中部) ○山川 志典(関東) ○藤久 真菜(近畿)
機関誌委員会	◎○飯倉 義之(東京) ○小堀 光夫(関東) ○中川 裕 (関東) ○柁村 裕子(関東)
会報委員会	◎○立石 展大(東京) ○伊藤 龍平(関東) ○繁原 央 (中部) ○関根 綾子(東京)
大会委員会	◎○今井 秀和(東京) ○伊藤 慎吾(関東) ○坂井 弘紀(東京)
例会委員会	◎○石井 正己(東京) ○熊野谷葉子(関東) ○中村とも子(東京) ○和久津安史(関東)
理 事	鵜野 祐介(近畿) 梅野 満興(中国・四国) 狩俣 恵一(九州・沖縄) 川島 秀一(北海道・東北) 高橋 晋一(中国・四国) 真下 厚 (近畿) 真鍋 昌賢(九州・沖縄)
監 事	菊地 暁(近畿) 香田 健治(近畿)
国際会議委員会	◎丹菊逸治(北海道・東北) 石井 正己(東京) 藤田 護(関東)

○受贈書籍(2023年9月～2024年1月受け入れ)

- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第56巻4号～9号 2023年7月～2023年12月
- ・鵜野祐介著『うたとかたりの人間学 いのちのバトン』青土社 2023年9月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第316号 2023年11月
- ・川森博司『ツレが「ひと」ではなかった 異類婚姻譚案内』淡交社 2023年12月
- ・小田淳一編訳『インド洋のクレオール民話 ―セーシェルとレユニオン―』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2023年12月

○2024年度は事務局が愛知淑徳大学交流文化学部 藤井真湖研究室に移転します。

学会の封筒に記載の住所をご覧ください。

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP(<https://ko-sho.org/>)から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。

入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。